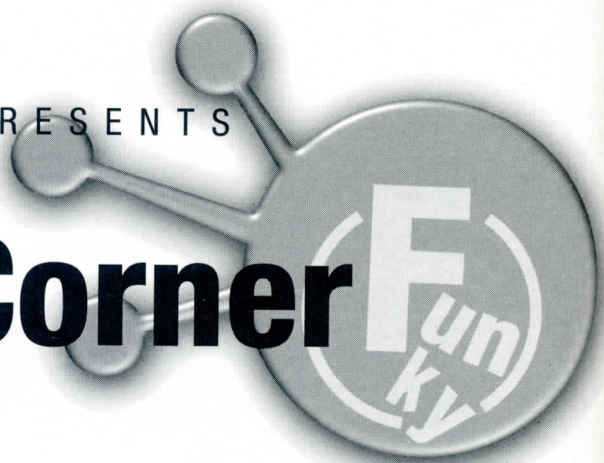


TOSHIRO HATA PRESENTS

波多利朗の Funky Corner

文●波多 利朗 text by Hata Toshiro
(URL) <http://www.funkygoods.com/>
(E-Mail) catty@mxp.mesh.ne.jp



古典的謎ば〜機 PS-1000

おもカメの話し

筆者の趣味の一つに、ロシアカメラの収集とそれを用いた写真撮影がある。筆者は主に、バルナック型LEICAのコピー機であるZORKI-1（ゾルキー1）をメインマシンとして使用しているのであるが、このほど、筆者の知人であり、生まれながらの廃人にして物理層プログラマーであり、また地獄のロシアカメラコレクターでもあるMadame Fatale氏が、面白いホームページを教えてくれた。「へなカメ探偵団」というタイトルのそのホームページには、その名の通り今まで見たこともないような「変なカ

メラ」が満載されており、しかもそこそこ手ごろな価格で販売までしているのだ（因みにホームページタイトルの「へなカメ」とは、察するに「変なカメラ」の略称であると思われる）。いやあしかし、これほど濃ゆ濃ゆのホームページは、滅多にお目にかかれないな……。URLは下記の通り。

<http://www.megahits.com/cagome/henacame.htm>
(001)

さて、このページを見ていたら、実にユニークなカメラを見つけたので、物欲モード全開でさっそく購入してしまった。それが、今回の前フリテーマとなるカメラ、SMENA（スメナ）8Mである（002）。

SMENA 8Mは、ロシアのカメラメーカ、LOMOの製品である。SMENAシリーズは、1952年に製造されたSMENA初代機から1993年に製造を終了したSMENA35



まで、多くの品種が存在する。この8Mは、1970年から1993年までの期間に製造された製品である (003)。

「へなカメ探偵団」ホームページでは、このカメラを「おもカメ」と称している。「おもカメ」とはおそらくは「おもちゃカメラ」の省略形だと思われるが、まさにその通り、ロシアにおけるおもちゃカメラなのだ。驚くべきことにこのカメラ、新品であるにもかかわらず販売価格がたったの3,300円だった。確かに、レンズ付きフィルムと称して販売されている日本の「使い捨てカメラ」は非常に安価だが、SMENA 8Mは基本機能がすべて揃った立派なフルマニュアルカメラであるにもかかわらず、この価格を実現しているところがスゴイ。

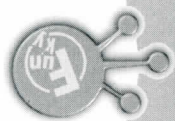
しかし、さすがにおもちゃカメラだけのことはあり、届いた製品の外観は極めてチープで、いかにも価格相応のものだった。前述した通り、SMENA 8Mは一応フルマニュアル仕様のカメラなのであるが、露出の設定部分に、数値による表記の他に「晴れ」だの「曇り」だのといったお天気マークが書かれていて、なかなか愛嬌がある。そ

ういえば、確か筆者が子供の頃使用していた、日本製の子供向けカメラ「FUJIPET」にもこういったマークが書かれていたなあ、などと思わず余計な郷愁に浸ってしまう。外観は極めて安っぽいのであるが、このカメラに使われているレンズは、なかなかどうして、侮れないものがあるのだ (004)。

このカメラに搭載されているレンズは、T-43 (f=4、40mm) という名称なのだが、実はこのレンズ、どうやらエルマーのコピー品を製造していることで有名な、ロシアのインダスター製のようで、写りが半端じゃなく良い。通常の商品企画であれば、カメラ本体の価格に見合ったレンズを設計して搭載するのが常識である。しかし、このSMENA 8Mはそういったことは全く考えられておらず、製造コストは二の次で、高かろうがなんだろうが、とにかく現在利用することができるレンズをとりあえず搭載してしまったとしか思えない。そのため、カメラ本体には分不相応に良すぎるレンズが搭載されるという結果になってしまったのだ。まさにロシアの底力。ロシアカメラ恐るべしといったところである (005)。

さっそく試写してみたのだが、ピーカンの条件ならばとてもおもちゃカメラとは思えないほど良く写り、「コイツ、本当におもちゃか?」と驚いてしまう。いやあ、これだからロシアカメラ趣味は止められないねえ……。

このSMENA 8Mの特徴は他にもあり、フィルムを巻き上げなくても、シャッターを切ることが可能なのである。従ってフィルムを巻き上げ忘れてシャッターを押すと、二重露出となってしまう。撮影する際には、必ず「フィルムを巻き上げてからシャッターを切る」といったようなルールを自分で決めておかなければならない。



003 LOMO SMENA 8Mの外観

おもちゃカメラSMENA 8Mの外観。販売価格3,300円の製品だけあって、その安っぽさは期待を決して裏切ることが無い



004 SMENA 8Mのお天気マークのアップ

露出設定ダイヤルには、「曇り」「晴れ」といったお天気マークが記されている。こんなところが余計なおもちゃっぽい。でも、妙に郷愁をそそるな……



005 8Mのレンズ

T-43と記載されたF=4/40mmのレンズ。このレンズ、実はロシアの有名なレンズであるインダスター製らしいのだ。従って写りはおもちゃカメラの域を出る。ほかにはできないのだ!



PS-1000のパッケージ写真

PS-1000のパッケージ一覧。残念ながら箱は紛失してしまった。本体、専用のシリバラケーブル各1本、ACアダプタ、マニュアルがついてくる

もともと、意図的に二重露出ができるため、面白い写真を撮影する際はかえって有利であるとも言えよう。

さらに、撮影したフィルムの巻き戻しは、シャッターボタンを押しながら行うという仕様になっている。この技を知らないと、撮影したは良いが、どうしたら巻き戻せるのかわからず、途方に暮れるということになる（これはかなりマヌケな状況だな……）。

このようにSMENA 8Mは、非常に良くできたレンズと癖のある操作性で、実にロシア的怪しさを持ち合わせた製品だ。さて、今回ご紹介する謎ば〜機「PS-1000」も、一見何の変哲もないマシンでありながらなかなか癖のあるパームトップ機で、その日本語化にはちょっとした技が必要な製品なのだ。

謎ば〜機 PS-1000

PS-1000は、1992年末頃から日本に登場した比較的古い世代のパームトップパソコンである。製造元は、この手のマシンメーカーでは割と有名な、台湾のTaidalwaveだと言われているが、なにぶん筆者のマシンにはメーカー名の表記が一切無いので、確実なことはわからない。Taidalwaveといえば、パームトップ界の傑作機で、モバイルギアの元にもなった「ME-386」を製造した会社である。そう言われれば、外観やキーボードなど、どこことなく同社の製品を彷彿とさせる（006）。

筆者はその昔、秋葉原のパソコンショップ「プロサイド」の店頭で、このPS-1000を見かけた記憶があるが、日本でも廃人連中の格好の遊び相手になっていたように記憶している。因みにPS-1000は、Zeos Pocket PCやPB-100

等、いろいろな名称で販売されていたようだ。この頃から、同一仕様で別名称のパームトップ機や、同一名称で仕様が微妙に異なるパームトップ機等、ユーザが混乱するマシンたちが多く世に出てくるようになり、ここから「謎のパームトップ機（謎ば〜機）」という傑作造語が誕生したことは、謎ば〜機マニアの間では有名な語り草となっている。

PS-1000の概要

PS-1000は、タッチタイピング可能なQWERTY 83キーを搭載したDOSベースの古典的マシンである。携帯端末、特に謎ば〜機といえば、筆者はこのPS-1000のようなプロポーションのマシンを真っ先に思い浮かべてしまう。それほどこのマシンの外観は、その後のパームトップ機の形状に影響を与えたと言われている（007）。

筆者のPS-1000は、ケース表面にメーカー名やモデル名を表すロゴマークが一切無いため、蓋を閉じた状態では、どこのメーカーのなんというマシンなのかわからない。このあたり、いかにも謎ば〜機らしい雰囲気が漂い、



PS-1000の外観

その後続々と登場するパームトップ機のデザインの基本とも言えるような外観である。大きくて見やすいCGA液晶と、タッチタイプ可能なキーボードが特徴



本体裏面のシール

PS-1000本体裏面に添付されているシール。メーカー名は記載されていないが、台湾製であることは確認できる

なかなか好感が持てるな。因みに、本体底面には下記のシールが添付されているが、台湾製であることはわかるのだが、製造メーカー名を特定することはできない (008)。

PS-1000は、メインバッテリーとして単三乾電池2本を、またサブバッテリーとしてリチウムボタン電池 (CR2032) を使用する。使用しているCPUがV30 (7.15MHz) と比較的低速であるため、消費電力はそれほど多くはないようだ (009)。PCMCIAカードスロットは、富士通のオアポケ (OasysPocket) やPoqet PCと同



009 PS-1000の背面

左から、バックアップ用ボタン電池、メインバッテリー、シリバラコネクタが並ぶ。バックアップ電池にはCR-2032を、またメインバッテリーには単三アルカリ乾電池2本を使用する。シリバラコネクタの形状は独自仕様



010

PS-1000のPCMCIAカードトレイ

左右に配置されたPS-1000のカードトレイ。PCMCIA Type-Iのカードしか使用することができない。Poqet PCと同様、トレイタイプを採用している



011

PS-1000のキーボード

非常に打ちやすいPS-1000のキーボード。後に登場するモバイルギアに一脉通じる打ちやすさが、すでに見受けられる

様、トレイ式を採用しており、Type-Iのカードのみ使用可能となっている。カードスロットは本体左右に搭載されており、それぞれA、Bドライブに割り振られている (010)。

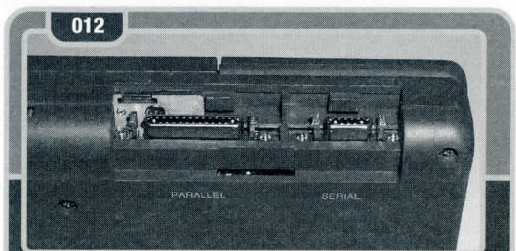
キーボードはタッチタイピング可能なキーピッチを備えており、キータッチも満足が行くものだ。キーボードの外観はTaidalwaveの名機ME-386と同じであるが、ME-386で発生したキーが若干ひっかかるような感触は、PS-1000ではあまり感じられない (011)。

液晶画面はCGA仕様で、アクティブエリアも173mm×67mmと広いので視認性は良いほうだ。液晶画面の右には、内蔵アプリである「Microsoft Works」のロゴが記載され、さらに下部には下記の表示が記載されている。

- ・ COMPUTER
- ・ COMMUNICATION
- ・ SPREAD SHEET
- ・ WORD PROCESSOR
- ・ DATA BASE
- ・ ORGANIZER

F3～F10キーは、内蔵アプリケーション起動のためのホットキーとなっており、それぞれFILER、PLAN、ToDo、PHONE、INFO、CALC、WORKS、UTILITYに割り振られている。また、キーボード左上にはCAPS、NUM、SCRLの状態を示すLEDが搭載されている。リセットボタンはキーボード右上のON/OFFキーの下に位置する、いわゆるシャープペンリセット方式だ。ACアダプタのコネクタは本体右側面にあり、9V入力仕様となっている。液晶のコントラストはキーボードで操作せず、本体右側にあるダイヤルで調整する。細かいことだが、液晶の濃度調整をダイヤル操作で行う方法は、環境に応じたすばやい調整が可能となり、使いやすくて個人的には気に入っている。

I/O関連は、本体背面にPARALLELとSERIALのコネクタを実装しているが、どちらも特殊仕様のコネクタと



012

シリバラコネクタのアップ

本体背面にあるシリアル、パラレルコネクタのアップ。通常はカバーで覆われている。向かって左側がパラレルコネクタで、右側がシリアルコネクタとなっている。いずれもコネクタ形状は独自仕様なので、付属してくる専用ケーブルが必要となる

なっており、専用ケーブルを用いなくてはならない (012)。

以下に、PS-1000の仕様を示しておく。

モデル名称	PALM TOP PC PS-1000
メーカー	Taidalwave (?)
CPU	NEC V30 7.15MHz/4.77MHz (動作速度を切り替え可能)
搭載メモリ容量	ROM 1.5Mバイト、RAM 1Mバイト
ディスプレイ	640×200dot CGA LCD 16グレースケール 【アクティブエリア: 173mm×67mm】
キーボード	QWERTY 83キー・キーボード (PC/ATコンパチ)
I/Oポート	シリアル×1 (COM1) 専用ケーブルを使用 パラレル×1 (LPT1) 専用ケーブルを使用
本体重量	550g (乾電池を含む)
バッテリー	メインバッテリー: 単三乾電池 2本 サブバッテリー: リチウムボタン電池1個 (CR2032使用)
PCMCIA	PCMCIA 1.0 Type-I 2スロット実装 (A:&B)
大きさ	245mm (W) ×115mm (D) ×25mm (H)
内蔵ソフトウェア	MS-DOS Ver 5.0 ROM Version Race Pen II MS Works
BIOS	Phoenix 8086 ROM Bios (XT)

PS-1000のドライブ構成とブートシーケンス

最初のバッテリー投入時、もしくはハードリセット時には、PS-1000は下記のメッセージを出力する。

```
Phoenix 8086 ROM BIOS Version 2.52.20
Copyright(c) 1984-1988 Phoenix Technologies
Ltd.
All Rights Reserved

DriveA : IC CARD
DriveB : IC CARD

Microsoft PCMCIA CARD DRIVERS 1.0
The Device Driver system installed 02 drive(s)
starting at drive A:

MS-DOS Power Monitor Extension Version 1.00
Copyright (C) 1990-1991 Microsoft Corp.

Microsoft ROMDrive version 1.00 virtual disk D:

TM8886 Virtual Disk Version 1.0
384k OK
```

システムを起動すると、PCMCIAカードドライバが導入された後、DドライブとEドライブに仮想ディスクを構築する。このうち、DドライブはROMドライブであり、MS-Worksが格納される。またEドライブは365Kバイト

程度の内蔵RAMドライブとして組み込まれる。

日本語化を行うには、PS-1000のシステム構成を調査しておく必要がある。PS-1000は下記5つのドライブから構成されている。

- A : PCMCIA Ver1.0 ICカードドライブ
- B : PCMCIA Ver1.0 ICカードドライブ
- C : 内蔵ROMドライブ (約342Kバイト) ←ROM DOSが格納
- D : 内蔵ROMドライブ (約1Mバイト) ←WORKSが格納
- E : 内蔵RAMドライブ (約365Kバイト)

システム起動時には、以下の順序で設定が読み込まれる。

1. システム起動は、Cドライブ (ROMドライブ) に格納されているconfig.sysとautoexec.batを参照し、内蔵ROM DOSから行われる。
2. もし、Eドライブ (RAMドライブ) にconfig.sysとautoexec.batがあれば、Cドライブのconfig.sysファイルを実行した後に、Eドライブのconfig.sysとautoexec.batを参照して起動する。
3. また、Aドライブ (ICカードドライブ) にautoexec.batが格納されていれば、Eドライブのautoexec.batを実行した後に参照される。

以上、文章で書くとは何かゴチャゴチャして分かりにくいのだが、要は基本的に内蔵ROMDOSから起動し、EドライブがRAMドライブとなっているため、ユーザ固有の設定を行いたい場合には、通常ここにユーザ固有のconfig.sysとautoexec.batを置けば良いということなのだ。

ただし、PS-1000の日本語化を行う際、config.sys中で日本語化デバイスドライバを登録すると、うまく動作しないといった「クセ」がある。この辺の事情については、今は亡きPC WAVE誌1994年12月号の特集「謎のバームトップ機日本語化計画」において、佐藤政弘氏が書かれている記事が大変参考になる。

余談であるが、この「謎のバームトップ機日本語化計画」は、謎ば〜機マニアにとっては非常に素晴らしい特集であった。それまで表に出ることの無かったバームトップ機を一堂に会して紹介しただけでなく、日本語化の手法まで記載している。おそらく、謎ば〜機の日本語化について体系的にドキュメント化した最初の記事と言えるであろう。こうしたレアでディープな記事を掲載する雑誌というのも、まず見当たらないのではなからうか? 筆者もこの記事には、大いに触発されたものだ。

閑話休題。とりあえず起動の方法がわかったところで、今は亡きPC WAVE誌の記事を参考に、お約束の日本語化を行ってみることにしよう。

お約束の日本語化

(1) 日本語化の概要

先ほども触れたように、PS-1000では内蔵のRAMドライブ (Eドライブ) にconfig.sysとautoexec.batを登録する方法では、うまく日本語化ができない。従って、日本語化はconfig.sysで組み込まず、フリーソフトのadddev.exeを使用して組み込む方法を採用する。adddev.exeは、DOSのコマンドライン上からデバイスドライバを組み込むことができるソフトである。これを用いれば、デバイスドライバをconfig.sys中に登録していなくても、後から自由に組み込むことが可能となる。adddev.exeで組み込んだデバイスドライバは、同じくコマンドライン上で実行するフリーソフトdeldev.exeでリムーブすることが可能だ。

さて、まずデフォルトでCドライブのROMディスクに格納されているconfig.sysの内容を見ると、以下のようになっている。

・ Cドライブ上のCONFIG.SYSの内容

```
buffers=20
files=30
device=c:\romdrive.sys
DEVICE=c:\vdisk.sys
```

デフォルトでは、ただ単にROMディスクドライブとEドライブのRAMディスクドライブを組み込んでいるだけにすぎない。同じくCドライブに格納されているautoexec.batは、下記のようにになっている。

・ Cドライブ上のAUTOEXEC.BATの内容

```
@echo off
prompt $p$g
path=c:\rp;c:\d:\;d:\dos;e:\
call d:\dos\doskey.com
$$auto$$
if errorlevel 4 goto normal
a:\autoexec.bat
goto end
:normal
if not exist e:\autoexec.bat goto do_racepen
e:\autoexec.bat
```



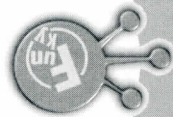
Race Penのメインメニュー画面

PS-1000の内蔵ROMには、Race Penと呼ばれるユーティリティソフトが格納されている。もちろん、このソフトは英語版だ

```
goto end
:do_racepen
cd rp
rp
:end
@echo on
```

デフォルトのautoexec.batでは、E、A両ドライブにautoexec.batファイルが見当たらない場合に、内蔵アプリケーションソフトであるRacepenが起動するように設定されている (013)。

日本語化に際しては、PS-1000のAドライブ (ICカードメモリ) に日本語化に必要なドライバソフト類を格納し、同じくAドライブ上に置いたautoexec.bat中で、日本語化デバイスドライバをadddev.exeで組み込むことにする。



(2) ファイルのコピー

まず、日本語化に必要なファイルをAドライブであるICメモリカードにコピーする。コピーするファイルは下記の通り。

(2-1) フォントファイルのコピー

今回日本語表示のために使用したフォントは、HP200LX日本語化キットで有名なオカヤシステムウェアのフォントである。Aドライブ上にFONTディレクトリを作成し、その中に下記ファイルをコピーする。

LXHN16X.FNT	16ドット半角フォント
LXZN16X.FNT	16ドット全角フォント
LXHN11X.FNT	11ドット半角フォント
LXZN11X.FNT	11ドット全角フォント
LXHN08X.FNT	8ドット半角フォント
LXZN08X.FNT	8ドット全角フォント

(2-2) 日本語化ドライバのコピー

日本語表示を行うために、フォントマネージャとして fontman.exe を、また CGA 用ディスプレイドライバとして yadc.exe を使用する。A ドライブに DOSC ディレクトリを作成し、その中に下記ファイルをコピーする。

FONTMAN.EXE	フォントマネージャ
FONTMAN.INI	フォントマネージャの環境設定ファイル
YADC.EXE	CGA用ディスプレイマネージャ
YADC.INI	CGA用ディスプレイマネージャの環境設定ファイル

各ソフトウェアの入手先を、下記に示す。

・ fontman.exe Ver 1.2.9

Hewlett-Packard PC users' Forum (FHPPC)
 データライブラリ7番 (HP100&200LX)
 77番 FMAN12A.LZH fontman 1.2.9
 もしくは下記サイトから入手可能
<http://www.vector.co.jp/soft/dos/util/se013803.html>
 fman12a.lzh

・ yadc.exe Ver 0.9.6

Hewlett-Packard PC users' Forum (FHPPC)
 データライブラリ7番 (HP100&200LX)
 85番 YADC09C.LZH yadc 0.9.6
 もしくは、下記サイトから入手可能
<http://www.vector.co.jp/soft/dos/util/se013889.html>
 yadc09c.lzh

(2-3) その他のソフトウェアの準備

その他に必要なファイルは、デバイスドライバをDOSのコマンドライン上から組み込むフリーソフトである adddev.exe と、WX2などの日本語FEPを使用する場合に必要な kkcfunc.sys である。これらのファイルを dosc ディレクトリ中にコピーする。

ADDDEV.EXE	デバイスドライバ組み込み用ソフト
KKCFUNC.SYS	かな漢字変換入力用プログラム

各ソフトウェアの入手先は、以下の通り。

・ adddev.exe Ver 2.55

<http://www.vector.co.jp/soft/dos/writing/se002001.html>

add255ex.lzh

・ kkcfunc.sys

MS-DOS Ver 5.0に付属のものを使用。

入手不可能の場合は、互換ドライバである LPKCC.SYSを使用するという手も考えられるが、動作については筆者は未確認

なお、LPKCC.SYSの入手先は、下記の通り。

<http://www.vector.co.jp/soft/dos/util/se060542.html>
 lpkcc101.lzh

(3) 環境設定ファイルの編集

必要となるファイルのコピーが終わったら、次に日本語化ソフトウェアの環境設定ファイルを編集する。編集を行うファイルは、fontman.ini ファイルで下記のように修正を行う。

・ FONTMAN.INIの内容

```

;
; fontx2フォント定義
;
[fontx2]
a:\font\lxhn08x.fnt
a:\font\lxhn11x.fnt
a:\font\lxhn16x.fnt
a:\font\lxzn08x.fnt
a:\font\lxzn11x.fnt
a:\font\lxzn16x.fnt
;
    
```

(4) 日本語ドライバの組み込み

最後に、Aドライブのルートディレクトリに CONFIG.DEV と AUTOEXEC.BAT ファイルを作成する。CONFIG.DEV ファイル中には、日本語化に必要なドライバソフトを記述し、AUTOEXEC.BAT ファイルにて、CONFIG.DEV ファイルを「ADDDEV」すれば良い。具体例を下記に示す。

・ CONFIG.DEVの内容

```

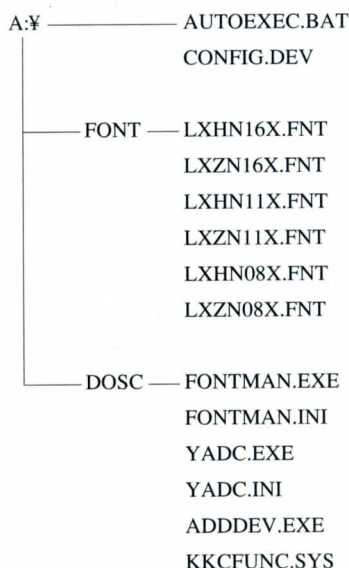
device=a:\dosc\fontman.exe -b5 -
fa:\dosc\fontman.ini -d
device=a:\dosc\yadc.exe -j
device=a:\dosc\kkcfunc.sys
    
```

・ AUTOEXEC.BATの内容

```
prompt $p$g
path=a:\;a:\dos;c:\tools;a:\bin;a:\vz;c:\;d:\d
os;
e:\
mode con rate=24 delay=1
a:\

adddev a:\config.dev
chev jp
```

以上必要なファイルとディレクトリ構成をまとめると、以下のようになる。



(5) 使用できるフォントサイズ

今回行った日本語化では、8、11、16ドットの3種類のフォントを切りかえて使用できるようになっている。具体的には、CGA用ディスプレイマネージャー「yadc」を

使用して、ビデオモードを切り替えれば良い。yadcの設定を以下に示す。

```
yadc -jp -v70 -h11 : 11ドットフォント使用モード (写真014)
yadc -jp -v70 -h16 : 16ドットフォント使用モード (写真015)
yadc -jp -v73      : 8ドットフォント使用モード (写真016)
```

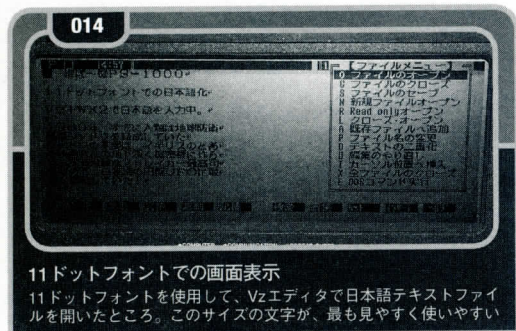
(6) 日本語FEPの導入

次に日本語FEPを導入してみる。今回は定番とも言えるFEP、WX2Ver2.71を使用した。まず、AドライブにWX2ディレクトリを作成し、必要となるファイルをコピーする。Aドライブに十分な余裕があれば辞書ファイルも格納できるのだが、今回はドライブ容量が不足したため、辞書ファイルのみはBドライブのルートディレクトリに格納した。

次に、WX2を組み込むためのファイルを作成する。日本語化と同様、WX2の組み込みはADDDEVコマンドを使用して行う。以下に、WX2を組み込む際の定義ファイルを示しておく。

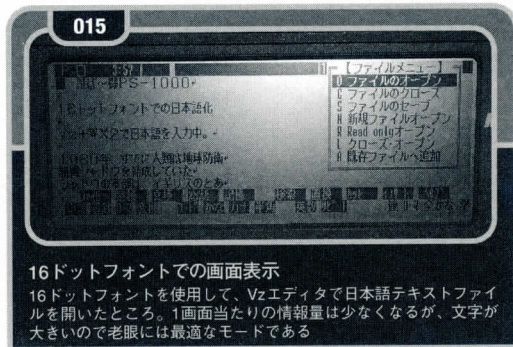
・ wx2.devの内容

```
device=a:\wx2\wxk.sys /a1
device=a:\wx2\wx2.sys /a1
/db:\wx2s.dic
```



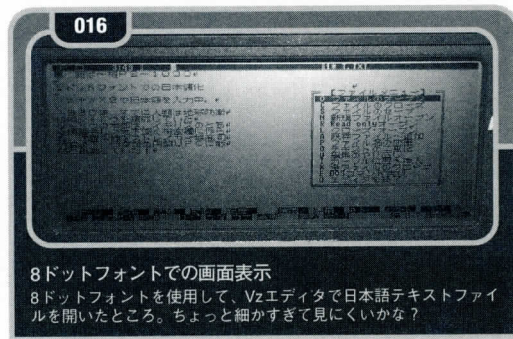
11ドットフォントでの画面表示

11ドットフォントを使用して、Vzエディタで日本語テキストファイルを開いたところ。このサイズの文字が、最も見やすく使いやすい



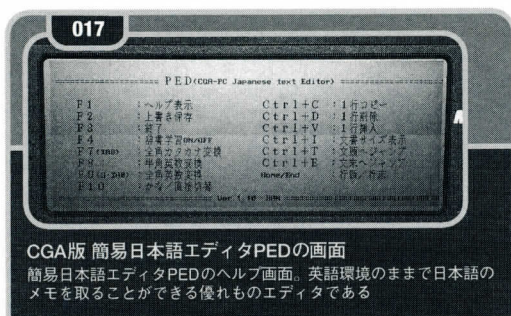
16ドットフォントでの画面表示

16ドットフォントを使用して、Vzエディタで日本語テキストファイルを開いたところ。1画面当たりの情報量は少なくなるが、文字が大きいので老眼には最適なモードである



8ドットフォントでの画面表示

8ドットフォントを使用して、Vzエディタで日本語テキストファイルを開いたところ。ちょっと細かすぎて見にくいかな？



CGA版 簡易日本語エディタPEDの画面
簡易日本語エディタPEDのヘルプ画面。英語環境のまま日本語のメモを取ることができる優れたエディタである

PS-1000の操作性

日本語化されたPS-1000上では、FDやMIEL等の代表的なフリーソフトが快適に動作する。また、日本語化+日本語FEPを導入するのが面倒な場合には、英語モードで即日本語テキストが作成できる簡易エディタ、CGA-PC版PED Ver1.10も使用可能だ。このエディタは、前回の本コラムでもご紹介したが、日本語環境を一切不要であり、必要なファイルをマシン本体にコピーするだけで、英語モードのまま日本語の編集ができるというシロモノだ (017)。

以上の準備が整ったら、日本語環境下のコマンドライン上から、下記コマンドを入力する。

```
ADDDEV WX2.DEV
```

これで、PS-1000にWX2が組み込まれ、日本語入力が可能となる。Vzエディタ+WX2の組み合わせで日本語テキストファイルを作成してみたが、やはりCPUが遅いため、変換には若干の待ち時間を要する。V30 (7.15MHz) というCPUスピードを考慮すれば、変換が遅いのも致し方無いと言えるであろう。しかし、メモを取るくらいであれば、十分実用になるスピードだ。むしろ、古いパームトップ機としては立派なほうである。

因みに、WX2を組み込んだ場合のメモリ使用量をVMAPコマンドを使用して調べてみたところ、以下のようになった。約430Kバイト程度のコンベンショナルメモリが使用可能となっている。FEPを組み込まない場合には、コンベンショナルメモリの空き容量は560Kバイト程度になる。

```
VMAP Version 2.01 Copyright (C) 1989-91 by c.mos
```

addr	PSP	blks	size	owner/parameters	hooked	vectors
064C	sys	1	1232	romdrive		
069A	sys	1	2736	vdisk		EC
0746	sys	4	12832	<config>		
0A6C	<--	4	2768	command		22 23 24 2E
0B1D	<--	2	4208	doskey		
0C26	<--	1	36640	15 21		
1519	<--	1	130832	t		09 10 16 2F
350B-A000		1	438080	<free>		

お知らせ

最近、筆者のホームページ「波多利朗のFunkyGoods」のプロバイダ引越し作業を実施した。これに合わせて、筆者もオリジナルドメインを取得した。新ドメインは

<http://www.funkygoods.com/>

である。ホームページは、内容的には以前と全然変わっておらず、更新も気の向くままといった感じであるが、とりあえず現在ハマっている「禁断のロシアカメラのページ!」だけは充実して行きたいと考えている今日この頃である。